大阪商業大学学術情報リポジトリ

老年のプライドーこの厄介なすぐれものー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2016-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 哲雄, TAKAHASHI, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/72

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

老年のプライド
この厄介なすぐれもの

高橋哲雄

問題　なぜ老年のプライドか？

プライドは厄介な感情で、とくにある程度の年齢になってある程度の立場を持つようになった人びと、さらにはその立場に何かの理由でかげりが出てきた人びとにとっては、深刻な問題になることがある。リタイア前後の知的職業人の場合は適切な対応を必要とすることが、とりわけ多い。

それでいてプライドは、コントロールされていれば貴重な働きをする感情であって、人間の成長や成熟、幸福に大きな寄与をしてくれる要素でもある。何とかと鋏（はさみ）は使いようと言うが、プライドはときには、よくもわるくも日常使用する範囲の鋏を越えた鋭利な刃物で、凶器にも利器にもなりうることから、デリケートな取り扱いが必要である。老年を生きる知恵探しを目指すなら見落とせない用具であるはずだ。そのプライドという心の働きにはどんな特徴や役割があるのか。刃物の喩えを続けるとして、用途別、サイズ別など、必要なアイテムの整理・分類から始めるとしよう。範例は、作家・文人の記録やその作品から多くをとった。

プライドの特異さ

そもそもプライドとは何かといった定義的な議論は後回しにする。ひとまず常識的な「プライド」理解に立って、この感情の持つ特異な問題性からスタートする。そして齢をとるとそれがどういうことになるか、どういうあたらしい問題を生むか、という話に進み、最後にはそんなプライドとわれらはどう付き合えばいいかに及ぶ。

ではプライドにはどんな問題性があるのか。

プライドは人間の心の働きのなかでは、正負の二面性がはっきりしているのを特徴とするめずらしい感情である。ほかの、たとえば喜怒哀楽といった感情であれば、正負、黒白、明暗と、ふつう一方向に働く。明るいよろこびはあっても暗いよろこびはめったにないし、あかるい悲しみや怒りも想像しにくい。もっとも、暗いよろこびといえば、ドイツ語には Schadenfreude（人の不幸を喜ぶ気持ち）という言葉があっ

て、これは「暗い、あるいは邪悪なよろこび」といってよい。またギリシャ起源の「カタルシス」（浄化）のように「あかるい悲しみ」といってよい感情もある。これらは一見プライドに似ている。しかし暗いにせよ明るいにせよ、どちらかの方向に働く。異方向に引かれることはない。

ところがプライドはプラスにもマイナスにも働く、扱いにくい厄介な心の作用なのである。生きる原動力にも破壊力にもなる。

身近に経験することだが、「プライドを持て」と叱られる。「プライドが高い」と非難がましくたしなめられる。「プライドが邪魔をする」と余計者扱いもされる。少なくても叱られ、多くても叱られる。どうやら「適量」があるらしい。それによって毒が薬に、薬が毒や別の薬になる。サリドマイドは障害児を生む毒性と、催眠、つわりの軽減、骨髄腫の治癒といった治療薬の両面をもち、アスピリンは、量によって解熱鎮痛と血圧を下げるのと両方の作用をもつ。ニトログリセリンは爆薬であるとともに、狭心症の特効薬である。プライドにはこうしたさじ加減ひとつでまったく違った役割を果たす一面がある。

ところで、いまプライドを薬にたとえたが、薬は健常人には不要である。しかしプライドは不要であろうか。プライドがなくていいか。「プライドが邪魔」と言っても、それは多すぎるのが邪魔というだけで、なくていいと言うのではあるまい。最低限のプライドも怪しい人間がかりにあるとして、そういう人は金を借りても踏み倒すことに抵抗がないだろうから、信頼関係を結ぶことはむつかしい。連帯保証人などもってのほか。プライドには社会的人間としてのパスポート的な意味があるのではないか。逆に、プライドの過剰な保有・発揮もトラブルの種になりやすい。当人はよくても、人との関係が円滑に営めるか。かなり特異な生き方になるのではないか。適量のプライドは社会的存在としての人間には欠かせない条件でありそうだ。これまで《薬＝毒》に喩えてきたが、もしかしたらそれはホルモンのように体内に保有され、内分泌される存在に喩える方が適切であったかもしれない。バランスが崩れればたちまち異常が起こる。

実際、プライドはその都度調達したり、自由に増量・減量できる性質のものではない。フロウではなくストック、つまり資産に当たる。資産は正に限ったわけではなく、増えたり減ったりするし、負の資産、つまり負債でもありうる。人間の場合このストックは「資性」といった表現を使ってもいい。はじめから負債を負って生まれてくる人もいる。大切な財産だが迷惑なお荷物の側面もある。

それはときに強力・激烈である。色恋や食慾の上に立つこともある。好きであっても自尊心が邪魔をして言えない（「たけくらべ」の美登利）や「武士の子は腹は減ってもひもじゅうない」（先代萩）。さらにはプライドを守るのに命をかけることもある。戦後闇をしないで餓死した判事もいたし、決闘で命を落とした詩人もいた。会津

戦争はプライドの戦いであった。「いやであってもいやといえない」特攻隊志願には圧力もあったがプライドの側面もあった。フィクションなら太宰治「走れメロス」や雨月物語の「菊花の約」。ともに命をかけての行為である。友情、あるいは同性愛の行為という解釈もあるが、プライドの作用が重いことはまちがいない。

齢をとるとどうなる

齢をとるとプライドは財産というよりお荷物の面が濃く滲み出る。プライドにとって危機が訪れる。拠りどころとしてきた多くが失われるからだ。

身体や頭脳、容姿の衰え、職がなくなって社会的地位も家庭内の権威も低下、現役時代の業績も風化、家族も故郷も姿を変え、残るはあのときこうしておいたらという悔恨のみ。他方では、それを償おう、落差を埋めようという心理的補償作用が働いて、残されたものや過去にこだわり、ライバルの引き下げに走るといった退行的精神状況が現われる。ゆきつく果ては過去の贋造（映画『旅路の果て』のルイ・ジュベ演じる自作ラブレターの件り）まで。

老人でも、めぐまれた階層、高学歴・高収入層ほど、現役時代との落差の大きさに傷つきやすい。とくに知識人にとってプライドは業（ごう）のようなものである。彼らは個人ペースでの仕事が多いから高齢になっても仕事が続けられ、老年期への助走期間も長いが、それでも落差解消はむつかしい。まして組織への関与度の高い管理職・技術職層は集団本位で行動するだけに、地位の低下とともに孤独・疎外感と、異なった世界への馴化に悩まねばならない。いわゆるアイデンティティ危機にとりつかれる。「定年後問題」である。渡辺淳一『孤舟』、岡田誠一『定年後』などの小説や、加藤仁『定年後』（07、岩波新書）――3000件ものインタビューをもとに多様な状況と豊かな対応を再現――を参照。小林恭二『父』は、作家・俳人である著者が、並はずれた才能にめぐまれながら、それをはみだすプライドと世間との軋轢に苦しめられた父（大手製鉄会社の重役であった）を語ったノンフィクションで、私がこのテーマを手掛けるきっかけを与えてくれた作品である。

ノンエリートの場合はどうだろう。彼らにはプライド優先の生活はできない。プライドはぜいたく品である。向田邦子「お辞儀」は家族には威張り、奉られている叩き上げの課長である父が葬式に来た社長の前で平伏して見せる場面を描く。深沢七郎「おくまの嘘歌」（『庶民列伝』）は逆に底辺に近い民の、肩がつぶれても歌の文句を忘れてもけっして弱音を吐かない姿を見せてくれる。これも、弱音を吐けば使ってもらえないという切実な状況があるからなのだった。

ついでながら、金銭とプライドの切実な関わりについてインテリたちの対応はどうであったか。「天才」であり底辺インテリ庶民でもあった石川啄木のプライドは、借

金するときどうだったか。海軍経理学校の教授で庶民とは言いがたいが債務地獄に陥っていた内田百閒は、もっぱら友人から借り歩いていた啄木とちがい、高利貸が相手だった。彼らとの付き合いの一部始終を小説、エッセイのネタにしていたが、どことなく他人事のようなゲーム感覚が漂っていた。彼に言わせると、地道に暮らしていてやっていけない人間には貸してはいけない、道楽や放蕩なら返してもらえる可能性があるから貸してもいいという哲学を高利貸しと共有していたのである。また、もっと裕福な身分の太宰治には、「走れメロス」を書くきっかけになったという説のあるエピソードがある。熱海の宿で檀一雄と流連(いつづ)けて金がなくなり、檀を人質に残して、師の井伏鱒二のところに金策に行く。いつまでたっても戻らないので檀が宿を説得して脱け出し、井伏を訪れたら太宰はのんびりと井伏と将棋を指していた。面倒をかけっぱなしの井伏に借金を言いだせなかったのである。怒る檀に「待つ身がつらいか、待たせる身がつらいか」と太宰節。階層ごとにプライドへの負荷の差のあることを物語る借金三題話である。

しかし、老いや病は死と同じく、どの階層をも「平等」にとらえる半面がある。介護現場での老人のプライドのあらわれ方がそれである。高学歴・高ステイタス老人の車椅子やステッキへの拒否反応、身体介護への抵抗――そもそもが介護対象になるのを屈辱視する。

他方、プライドがあるとはとても思えぬ言動をとる人も増えた。記者会見での大会社の社長の謝罪はもう日常の風景になった。土下座のようないやな現象が横行する。首相が公然と天下周知のうそを言い放つ(「福島はコントロールされている」)。若い年齢層でも親の七光り族が公然と胸を張ってのし歩いている。下駄を履かせてもらうことへの拘りは地を払った。プライドの社会的相場は低下の一途をたどっているかに見える。老人人口の増加に伴い。もしかしたら老いのプライドにも「みんなで渡れば怖くない」的な変化がおころうとしているかもしれない。「硬骨」は消え「恍惚」は増えるのだろうか。

プライドとは?

ここまでは定義抜きで「プライド」という言葉を使ってきた。日本語の語感によるカタカナ版「プライド」である。英語の原義も一緒に、あらためて一つの概念として意味を考えないと、話が進まないところに来た。

プライドは英語ではどうなのか。ジェイン・オースティンの『プライドと偏見』Pride and Prejudiseの邦訳七点中「高慢」と訳されたのが六点、「自負」が一点(中野好夫)、それを原作とした映画では「プライド」が選ばれ、研究者では新井潤美が最近の自著で「自負」を採択した。

しかし、代表的な日本語の辞書（小学館『精選版日本国語大辞典』）ではこうなっている。

> 自己の才能や個性、また業績などに自信をもち、他の人によって自己の優越性、能力が正当に評価されることを求める気持、またそのために品位ある態度を崩すまいとすること。

ここには「高慢」の意味はない。「自負」、「矜持」あるいは「誇り」といった感じである。

それが、やはり代表的な英語辞書（Oxford Dictionary of English, 2nd.Ed. Revised, 2005）では、こうなる。

> 自己や近しい人の、業績および広く認められた稟質 quality や所有物 posessions から得られる深い喜悦、満足の感情

英語と日本語で意味の違いは二つ、「近しい人」 close associates が日本語には入っていないことと、英語では喜悦、満足感に、日本語では評価、希求に重点がおかれているという差が読みとれる。これは興味深い。英語では評価対象に自分だけでなく周囲・仲間が入っているが、日本語では自分だけであること、また英語では主観的な要素を重く見るという自己準拠性が、日本語では、客観性というか他者準拠性や、態度を問題とする意思性が前に出ていることがうかがえる。ただこれは、代表的な辞書であるとはいえ、そのまま両国のメンタリティの差異に結び付けられるわけにはいくまい。

両者をつきあわせると――

⑴ 自己による自己および・もしくは近い他者へのプラス評価。そのさい絶対評価、相対評価は問わない（人によって分かれる）

⑵ 評価される自己は帰属（先天的な要因）と達成（自己の業績）の両面に分かれる

⑶ 他者による高い評価の希求と満足

⑷ 高い評価にふさわしい態度維持の努力［日本のみ］

とまとめられよう。

区別されるべきポイントが二つある。まず二つの「自己」――評価する自己と評値される自己――があること。

評価する「自己」

プライドは基本的に自己準拠的な概念なので、評価主体である「自己」の役割は重要である。自己評価がきちんとできるか。 proper に、 true に, あるいは just に。

タイプ 1　評価のあまさ、からさ、ずれ、はずれ

うぬぼれ型。自己を過大評価する傾向がある。高慢 arrogance とか false pride ととれることがある。

へりくだり型。過小評価の傾向。

バイアス型。的外れ、勘違い、ずれる、わかっていない――「つきかげ」以後の斎藤茂吉。 unreasonable pride

タイプ 2　絶対評価か相対評価か

絶対評価型。人と比べない。自分が満足する水準であれば、それでいい。プライドに「適量」はないと考える。

相対評価型。他者との比較を評価に入れる。他者との優劣差も重んじる。「虚栄」 vanity との境界線が引きにくい。

タイプ 3　主観評価か世間評価か

主観的評価。自前のレンズで見る。ゆがんでいてもいい。独善 self-justification になりやすい。

世間評価。他者の（客観的と言われる）評価を借りる、意識する。世間の眼が入るわけで、自尊心というよりは「体面」 respectability に近い。

いずれにしても、まともなプライドを持つためには、自己制御、自己批判の能力と意思が求められる。そのためには「高慢」や「虚栄」、「体面」、あるいは「含羞」、「羞恥」といった、類似の、近い感情との境界を絶えず意識することが大切である。また「自尊心」と「自負」、「自恃」との微妙な違い――英語でいえば self-esteem と self-confidence あるいは self-complacency――を識別する感覚も研ぎ澄ましたい。

評価される自己

評価される側にも区別しなければならない重要な対象のちがいがある。自己の中の何を評価するか。それはまず**帰属** ascription と**達成** achievement に分けられる。

帰属とは、家系、親兄弟、身分、資産、郷里、国、民族、社会体制、身体的・知的特徴、能力、容姿など、自己に与えられた生得の条件を指す。当人がえらべないものである。

達成はそれにたいして、学歴、職業、仕事や居住の場所、業績、教養、配偶者や子

供、友人、部下など、主として自己がなしとげたか、形成に寄与したものである。

ただ、両者の線は引きにくい。容姿については、身長は帰属的、体重は達成的と言われることがある。齢をとってきれいになる人がいるが、それは達成型であろう。学歴や職業は帰属に帰せられる部分も少なくない。めぐまれた家庭の子女は進学でも就職でも有利な傾向のあることは否定できまい。配偶者の選択でもしかりである。それに比べると業績、教養や、友人、部下などヒューマン・ネットワークは個人の努力や力量をよりつよく反映するから、達成の度合いがつよい。

帰属にプライドを感じるのと達成に感じるのとでは、プライドの充足度にちがいがある。家柄や資産、「親の七光り」といった与えられたものを誇りとするか、そうしたものを頼らず極力自己の力で道を開いてゆくのに胸を張るのとでは、満足感がちがう。同じ山に登るのでもリフトを使うのと徒歩で登るのとでは、得られるものの質がちがう。エスカレーター型が悪いとは言わないが、親でも他者であるのだから、他者を誇るのは「自尊」「自恃」とはいえまい。英語で self-complacency というのがそれであろう。

同じ親でも、貧しいなか女手ひとつで育て上げてくれた母親を誇りとするのは一味ちがう。子供の前で屈辱的な行動をとった向田邦子の「父」についても同じである。帰属に恵まれない親が達成のために味わった苦労への共感と敬意が入るからだ。

逆に帰属にめぐまれると、めぐまれたことに負い目を抱く人もめずらしくない。とくに知識人ではそうである。津軽の大地主の家に生まれた太宰治は代表的な例。志賀直哉や辻井喬もそうであった。彼らの作品は反発や反抗、甘えをないまぜながら、独特の屈折した緊張関係をつくりだした点で、ふつうとは逆の意味で、境遇と切り離せない。

帰属へのプライドでもなく、達成への誇りでもない、第三のプライドともいうべきものもある。達成へのプライドをかりに自己の過去へのプライドとするならば、帰属へのそれはその過去をつくった大過去へのプライドと言ってもいいだろうが、そうした後ろ向きの感情ではなく、むしろ未来に向かって自己のなしとげようとする**目標、理念、理想**への投企 projet のかたちをとったプライドがあってもおかしくないのではあるまいか。あるいはもっと気楽に自分が好きなもの、愛するものへの自負といってもいい。要するに自己がよしとするものへの自信をプライドという強力な情念で支えることの大切さである。

いのちながらへて還るうつつは想はねど民法総則といふを求めぬ　　吉野昌夫

これは昭和18年の学徒出陣式――「七万人の合同葬」と言われた――に駆り出されたある東大生の歌であるが、生きて還る希望のうすいなか、なお学問への情熱を失わ

なかった若きインテリの気概に打たれる。
　もうひとつ、35歳という若さで亡くなる直前まで日本の短詩世界を牽引してきた正岡子規の最晩年の短歌を併せ掲げておきたい。

　　真砂ナス数ナキ星ノ其中ニ吾ニ向カヒテ光ル星アリ

　われら老人も残り少ない時間を，途中で時間切れになるかもしれないとしても打ち込める何かに費やす酔狂気があってもよろしいのではないか。

プライドとの付き合い方

　さて肝心のプライドとの付き合い方である。まず大きく、自己の老い、衰えを認めるか、認めないかという分け方が可能である。
　老いの現実を認めない、拒否するタイプは、さらに二つに分かれる。一つは精神年齢が実年齢に追いつけない「万年少年」型である。よくもわるくも気が若い。養老猛司は自分を老人と思うかの問いに答えて、人が言うからそうかと思う、会合でいつの間にか上席に招じられる、山歩きのとき足早に歩くとブレーキをかけられる、要するに自分で老いを意識することはないと語った。養老は現実に若いからいいが、衰えているのに老人という自己認識のないタイプの人はけっこう少なくなく、実は私にもそうした要素は多分にある。現実、とくに肉体は相当悲惨なのだが、認識する自己の採点力は甘い。ボロボロの状況を、きちんと捉えきれない。何となく若い気でいる。実際には若いというより幼い。肉体と精神の年齢に相当な開きがある。自分に甘く、能天気、未塾、幼稚。認識のズレで「怪我」をする危険に常時さらされている。
　ただ、もうすこしりっぱな「万年少年少女、ないし青年」型の老人もたくさんいる。「不良老年」、「暴走老人」型もそれに加えてもいいかもしれない。彼らは評価対象にされる自己も若い。宇野千代、日野原重明、田辺聖子、鶴見俊輔、野坂昭如、金子光晴、そしてもちろん石原慎太郎。金子などは79歳で亡くなる二週間前に若いファンの女性をラブホテルに連れ込んだ。
　こういう人びとはプライドが傷つかない。老いも衰えもしていないし、おおむねそういう認識なのだから、落差も劣等感も感じようがないのだ。
　プライドが傷つかないですむかもしれないもう一つのタイプには「やせがまん」型がある。前者が現実を受け入れられない｛その能力・資格がない｝のに対して、受け入れようとしないのである。「老いの一徹」というか「片意地」というか、「おれはそんな爺」ではないと言い、「おじいさん」と言われるのを嫌う。そこには、よくいえば、一種の美学が働いているかもしれない。でも本当のところ傷ついていないかは疑

問である。内田百閒、野坂昭如あたりはどうだろうか。

「枯れる」ということ

大きな分け方のもう一つは自己の老いをはっきり認めるタイプである。そのうえで老い衰えた自己の現実に合わせて自己のプライド支出を抑制するやり方がひとつある。力が落ちたのだから素直にそれに合わせて大きなプライドを持たない――その方が楽であるし、自然でもある。プライドを等身大化すると言ってもいいし、軟着陸させると言ってもよい。それこそが老人の知恵というものだ。というのがもっとも代表的な伝統的解決法で、しばしば「枯れる」とか「丸くなる」、「角がとれる」といった言い方になる。別の言い方だと「老成」とか「老熟」となろうか、老衰、老化を補うスキルとして、縮小均衡をめざす。老境を対象として主に身辺を描いた私小説や随筆類は、静かでこじんまりした工芸品的小世界を築きあげることによって、プライドに落ち着き先を与えてくれる。駒田信二編『老年文学傑作選』に登場する藤枝静男、尾崎一雄、木山捷平らの熟成した作品ほその典型。森鷗外の晩年の史伝もそれに加えられよう。

体内に枯山水の微光かな　　（橋閒石）

その前提として**「あきらめ」**がある。鷗外のいう Resignation である。鷗外の場合は外的な事情から文学上の野心も、恋愛も、栄達も諦めねばならず、その憂悶が異様にはげしい遺言書のかたちで最後に噴き出す。つまり彼はほんとうには諦めてはいなかったわけで、 Resignation をみずからは「平気」と意訳したりしている。強がっているわけだ。しかし老いにはそうしたなまぐささがないと見られているところから、「超俗」とか「枯淡」、「滋味」、あるいは「可愛い」、「親しみやすい」といったプラス・イメージと容易に結びつき、それによって、「枯れる」は単なる生物学的衰弱ではなくなり、一段と高尚な境地に祀り上げられる。プライドの基準を下げる（自己評価を甘くする）のに抵抗を覚える老人も、到達できるレベルが高いのならと納得するかもしれない。志賀直哉が多くの人を惹きつけたのは、『暗夜行路』の終わりに近い大山の曙のシーンに象徴される主人公の求道と再生のイメージであった。

老いを認めるが、むりには合わせない、簡単には諦めないという立場もある。進んで「枯れる」ことはしない。精神科医・なだいなだの提唱する「人間、とりあえず主義」がそれである。「とりあえず今日を生き、あすもまた今日を生きよう」とするもので、みずからを「とりあえず医師」と称し、「人生は仮採用のまま退職まで行くと思った方がいい」ともいう。「本採用」にならないと腰をすえて取り組めないとか、

「完璧」な事前設計どおりにやらねば気が済まないといったメンタリティに異議を唱え、「だまし、だまし」の部分的解決を積み重ねる。

あきらめない

老いがもたらす落差を認めはするが、あきらめない。そういう生き方の変種を考えてみよう。つまり、プライドの活かし方――その方向をどう変えるか、どういったチャンネルに落とし込むか、と言ってもいい――をいくつか探ってみたい。半分お遊びを承知で、プライドを幸せに調節する齢の取り方を提案してみようと思う。

⑴ **おしゃれに**

哲学者・九鬼周造は『いきの構造』で、江戸前美学である「いき」は「媚態」（色気）、「意気地」（意地）、「諦め」（垢抜け）の三つの契機から成るとした。「諦め」についてはすでに言及したところだが、切り捨てるべきところを切り捨て、すっきりさせるという意味にとる。九鬼の「いき」の真髄をおそらくもっとも忠実に体現した文学者は永井荷風であろう。色恋沙汰にしても彼は「媚態」、つまり相方との距離を詰めながら埋めないで、緊張関係を保つ。好きな娼妓でも囲ったりはしない、アメリカで惚れた女性もフランスに連れて行かない。世情に背を向けて「戯作者」に徹し、見様によってはこのうえなく恰好悪い死に方をした彼の反骨は、申し分のない「意気地」であり「諦め」でもあろう。

もうひとつの本来の「いき」により近いおしゃれは、プライドをグレイド・ダウンするのではなく逆にアップする行き方である。山好きのフランス文学者・串田孫一は老い方についてよく「ちょっと気取って」と言った。なまのプライドでなく、まさに「垢抜けした」ものにしようというのである。俳人・森澄雄は、進む老眼を「花眼」と詠んで愉しんだ。それは「痴呆」を「認知症」と読み替えるのとはまるで違う。言葉の言い換えかえゲームを楽しむのである。関容子の『日本の鶯　堀口大学聞書き』は才色すぐれた若い聞き手と老詩人の間に成立した互いに十分異性関係を意識したうえでの、実に品よく、それでいて際どく艶っぽいやりとりを含み、「いき」の見本。こんな女性から話をせがまれるよう男を磨かなくっちゃあ。まだ遅くはあるまい。

⑵ **ユーモアを**

「ユーモア」とは自分をネタに笑いを誘うことで、自分の中の二つの自己の間、また他者との関係をなごませるやり方といった理解が一般的であるようだ。それからすれば、老いや衰えは格好の肴になりうるわけで、事実老いをしゃれのめすことによってストレスを緩和させるような作品が多く生まれている。ただ、そのなかには本来の

ユーモアとはいいにくいものもある。

水たるる昔の姿偲べとや今したたるは老いの鼻汁　（堀口大学）

は「自嘲」とまではいかなくても「自己憐憫」に近く、笑えない。上質のユーモアとは言いがたい。同じ老残を唄うにしても

ヨン様がゐぬチャンネルに切り替ふる心のせまき老人われは　（竹山広）
階段の昇りは膝に障りなし「ワタシクダラナイヒト」降り難儀す　（宮英子）

の方が諧謔味に富む。竹山には

老ふかき蛍光灯が一度二度まったをしたるのちに点りぬ
点眼の一部始終を見たるのち退屈をして鴉は去りぬ

といった、イギリス流ユーモアの核心にある「観察」、「発見」、そして「共感」の喚起[1)]を具えた老いの歌もある。おかしさという意味では

往復の切符を買へば途中にて死なぬ気のすることの不思議さ　（斎藤史）

は、斎藤茂吉の天然ボケとは一味ちがった奇妙な味の歌で、一口に老いのユーモアといっても奥の深さがうかがえる。

⑶　理解し物語化する

これらすべての前提にはプライドの実態をちゃんと観察し理解する作業が必要である。ここまでの篩わけ、腑分け、比較や例示、区別も、自己を知るための試みの一部であった。理解とはものごとに筋道をつけられることであるから、つまりストーリーが作れるということである。自分にとってのプライドが何であり、それをどう生かせるかに自分なりの物語をもつことは老人にとって大きな意味を持つはずである。物語に組み立てる過程で理解は深まるであろうし、それによってさらに物語の射程は延び、結構は広がる。生き方に還ってもくる。多くの老人が「自分史」の執筆を試みるのは、本能的にその効用を察知しているからではないかと思う。

1）H.W.Fowler: Modern English Usage

とはいえ、老いほど多様な現れ方をする状況は少なく、ここに見てきたのはそのわずかな道筋を例示したにすぎない。たとえば、はじめに庶民のプライドが生活の重圧のまえに押し殺されるケースを示したが、それはサラリーマン階層についてのことで、仕事・生活面での自由度の高い個人経営、職人、とくに農民はプラス・イメージのプライドを愉しんでいる例がじつに多く、専門職をはるかにしのぐといってよい。そうした無名の職業人の誇りを、やはり短歌で例示する（小高賢『老いの歌』）。

相撲界三十引退農民は生涯現役百茄子作る（奥中敬一）
起き抜けにひと仕事して飯うまし今そのことを「朝活」だって（毛涯潤）
時期来れば畑仕事の段取りに追われ放しや老いの身出番（西村修）

後記：
本稿は2013年６月21日の甲南大学での講演原稿を大幅に改訂して書きとげられた。コメントを寄せてくださった多数の方に感謝したい。